

平成22年度 附属中学校「教育相談室」活動報告

青木 真理^{*a}，金成 美恵^{*b}，樋上 聖^{*c}，根本 光二^{*c}
菅野 重徳^{*c}，小針 伸一^{*d}，白石 豊^{*e}

附属中学校を主幹校とする「教育相談室」の活動に関して、平成22年度の活動内容、相談件数と内容などについて報告し、成果と今後の課題を検討する。

〔キーワード〕 教育相談室 スクールカウンセラー 大学附属中学校 教育相談組織
ピアサポート

I はじめに

福島大学附属4校園では平成17年度より、共同事業である「教育相談室」が設置され、附属中学校を活動母体として運営されてきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。

「教育相談室」設置に先立ち、平成14年度からスクールカウンセラー（以下SC）が配置され、18年度には、従来の青木（大学と兼務）に加え、非常勤職として金成が6月より雇用され、2名体制となった。金成は附属中学校に加え附属小学校にも勤務している。また、ニーズに応じてSCは附属中学校に隣接する附属幼稚園の保護者の相談にも応じている。

本報告は平成22年度の「教育相談室」について、附属中学校を中心としたSCの活動、附属中学校の教育相談推進委員会、「ピアサポートプログラム」、附属四校園教育相談推進委員会の4点から報告する。執筆の分担は、IIを主として金成が、青木と協議しながら執筆、IIIを樋上、菅野、根本、IVを金成、Vを小針が執筆し、そのうえで執筆者全員が議論を行い、青木の責任で全体をまとめた。

II スクールカウンセラーの活動

1. 活動形態

平成22年度におけるSC活動は108日間であった。通常勤務は1回あたり4時間であるが、教育相談推進委員会への出席のために2時間程度の短時間勤務をした日も延べ日数に含めた。またこれ以外に附属小学校に11日出勤した。

通常は青木が主に月曜日13:00から17:00、金成が火曜日・木曜日10:00から14:00の時間帯に勤務した。附属小学校では月1回、主に月曜日の11:00から15:00に勤務した。勤務の予定は後述の「スクールカウンセラーだより」と相談室前のドア表示で生徒や保護者に示した。

活動は「スマイル・ルーム」と呼ばれる附属中学校

の相談室が中心で、生徒や保護者の相談やピアサポートなどの体験活動も相談室で行った。隣接する附属幼稚園の保護者も面接の際は相談室に来室した。附属小学校での活動は主に授業参観など児童観察であるが、少人数支援担当者とのコンサルテーションは少人数支援室（通称ほっとルーム）で行い、本年度から実施した「中学校入学前相談会」に申し込んだ親子面接・保護者面接も少人数支援室で実施した（後述）。

2. 活動回数、相談件数、相談内容

平成22年度にSCが関わったケース数は40件で、並行面接または親子面接を行ったケースが9件、面接人数は51名であった（表1、表2）。

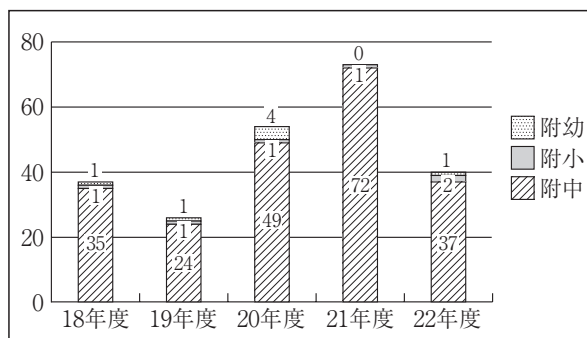


図1 年度別相談件数

年度別比較すると、平成21年度と比べると件数は35件（図1）、面接回数は65回の減少であった（図2）。減少の理由としては主に体験活動の来室者数が減ったことが考えられる。平成21年度は体験活動の来室者数は46名、来室回数は79回だったが、平成22年度は22名、40回であった。これは昼休みに定期継続的な面接が行われたことで、体験活動目的の生徒が来室する機会が減少してしまったことが原因と考えられる。昼休みは多くの生徒が自由に相談室に入出入りできる時間であるが、原則的に生徒のカウンセリングは授業時間以外に行っているため、個別相談を希望する生徒にとっても昼休みは貴重な時間である。この場合相談したい生徒

* a：教育相談部門，附属中学校スクールカウンセラー
* c：元附属中学校

* d：附属中学校副校長

* b：附属中学校スクールカウンセラー
* e：人間発達文化学類，附属中学校校長

が優先されることはやむを得ないと考える。相談室での体験活動は悩み相談の意欲の少ない生徒が相談室でSCに出会い、相談したいときに即相談できる“敷居の低い相談室”を目指す活動の一端であるが、個別相談を重視すると、体験活動の回数は減少することになる。

ただ、21年度から行っている、昼食時間に各教室をSCが訪れ多くの生徒と直接話をする活動は、体験活動減少により生徒と出会う機会が減った分を補う活動となっていると言えるだろう。

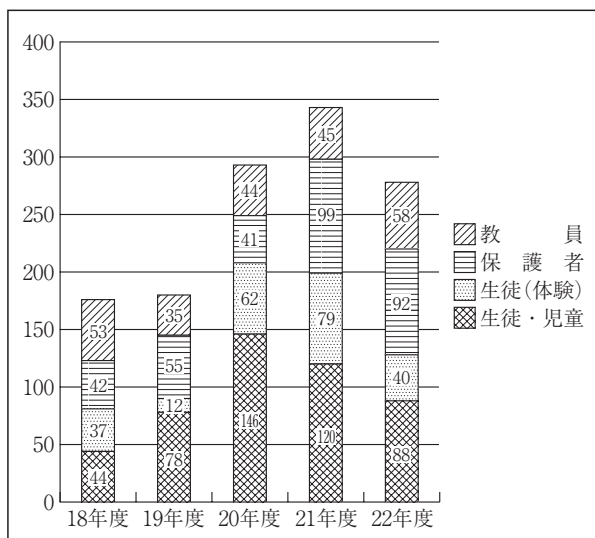


図2 面接対象者別面接回数

相談者の内訳は児童・生徒33名、保護者17名、卒業生1名である。

来談目的別人数と来室回数は、児童・生徒と保護者に関しては、相談目的は29名、180回、エゴグラムやピア・サポート活動など体験活動が22名、40回である(表2)。相談目的の者は平均来談回数6.2回、体験目的の来談者は1.8回と、来談目的によって回数の差が見られた。相談目的のものでは来室が30回を超えた相談者もあり、それ以外のケースは平均4.2回であった。体験目的では特にエゴグラムの体験者は後日テスト結果のフィードバックを受けることが多く、来室が2回程度になることが多かった。SCは昼食時や保護者会などの機会を捉えて早めの相談を呼びかけており、そうした働きかけに応じたケースは、深刻化する前に多面的に対応でき長引かずに終結することが多いと推測される。

また教員の相談は15名、58回で、コンサルテーションが主な内容である。

相談内容に関しては保護者面接の人数増加に伴い、育児や子どもへの対応に関する相談が増えたのが本年度の特徴といえる(表3)。なかには両親で相談に訪れるケースもあり、要因としては父親の子どもへの関わりが増える傾向にあることや、家族だけではなくSCという第三者の介入により家庭内の問題が意識化

され、父親が直接働きかけようと意欲を持ったことなどが考えられる。

表1 平成22年度のSC相談件数

関わった相談ケース	40件
校種・学年別件数	
附属中	37件
1年9件, 2年14件, 3年13件, 卒業生1件	
附属小	2件
附属幼稚園	1件

表2 平成22年度のSC相談の面接回数

面接の対象	人数	面接回数
生徒・児童	12	88
保護者	17	92
教員	15	58
生徒(箱庭・エゴグラム・ピアサポート等)	22	40
計	51	278

表3 平成22年度のSC相談の内容

箱庭・エゴグラム体験	23件
育児・子どもへの対応	11件
不登校(登校しぶり, 別室登校含む)	9件
家族関係	9件
身体症状	7件
集団不適応	6件
友人関係	6件
問題行動	6件
発達	6件
不安感・抑うつ感	4件
進路	4件
その他	1件

* なお、1つのケースが二つ以上のカテゴリーにまたがることもある。

3. 体験活動

体験活動は箱庭体験、エゴグラム体験などで、相談動機の高い生徒も気軽に立ち寄れる相談室づくりを目指し実施している活動の一つである。体験活動で一度来室した生徒は、SCがどんな人物かわかり、また相談室を実際に見たことがあるため、悩みを抱えた際に比較的緊張せず相談に訪れることができると推測される。悩み事ができて初めて、会ったことのないSCと、入ったことのない未知の場所で会うことのハードルの高さを想像すると、SCの顔と場所を知ってもらうことで来室への緊張感を緩めることができるのではないかと考えている。本年度も新規相談者のうち2名は前年度の体験活動経験者であった。

本年度の体験者人数は箱庭体験が19名、エゴグラムが8名、ピアサポートプログラムへの参加が6名であった。箱庭は仲の良い生徒が連れ立って複数名で来

室し共同制作をすることが多く、メンバーを変えながら複数回来室する姿が見られた。ピアサポートプログラムについては後に述べる。

4. 昼食時間への参加

平成21年度から始まったSCによる昼食参加は、SCが直接生徒と話す機会を持つことを目的に企画された。各クラスの生活班は8班で、各班5名程度の構成である。平成22年度は3年生全クラスと1年生3クラスで実施され、SCは年間を通して約280名の生徒と昼食を共にした。このようなSCのアウトリーチ活動は待ちの姿勢ではなく積極的に働きかける活動であり、ほとんどの生徒が必ずSCと顔を合わせる機会となる。SCは相談室に来室する生徒以外とは普段ほとんど接する機会がなく、また先述のように今年度は昼休みに生徒が自由に相談室に出入りできる時間が十分取れなかったことから、多くの生徒と直接顔を合わせる昼食時間参加は“敷居の低い相談室”活動の大きな役割を担っているといえる。

また、要支援生徒と接して行動を観察し、支援の在り方を検討する資料を得る機会ともなっている。

5. 中学校入学前相談会

本年度より、附属小学校における「中学校入学前相談会」が、入学が決まった児童・保護者を対象に始まった。入学を控えて新しい学校生活に不安を持つ児童や保護者の不安軽減と、入学後の学校適応が容易になるよう情報提供することが主な目的である。

今回の呼び掛けには2組の申し込みがあり、それぞれ児童や保護者、親子での面接を実施した。

こうした試みは児童・保護者の不安軽減だけでなく受け入れる中学校にも必要に応じて情報提供されることから、いわゆる“中1ギャップ”を回避するための方法として有効に働くものと思われる。

6. スクールカウンセラーだより（ニューズレター）

平成22年度は特別号と称した2号を含めて計10回発行した。内容は主にSCの勤務日程のお知らせであるが、文化祭の感想など時期に合わせた内容を盛り込んだ。

「スクールカウンセラーだより」は生徒向けの配付物であるが、自宅に持ち帰り保護者も目を通す。記載された保護者向けの電話予約の方法に則り予約連絡が入ることもあった。

なおSCの勤務日は養護教諭が発行する「保健室だより」、各学年発行の「学年だより」にも掲載された。

スクールカウンセラーだより No.8
 2010.12.1 福島大学附属中学校スマイル・ルーム

お弁当めぐり

以前お知らせしたように、カウンセラーたちは5月から3年生のお弁当の時間に各班を回り出会の時間を続けてきました。普段なかなか接する機会のない皆さんと直接話ができて、15分間と短くはありますが楽しみな時間です。3年生とのお弁当時間もいよいよ3年1組8班を残すのみとなりました。話し足りなかったという方、カウンセラーに聞きたいことがあったという方、遠慮なく話しかけてくださいね。

3年生を一回りすると、次は1年生のクラスに出没する予定です。1年生の皆さんとの出合いも楽しみにしています。 カウンセラー 青木・金成

12月の予定

月日	曜日	担当	勤務時間
12月2日	木	金成	10:00-14:00
12月7日	火	金成	10:00-14:00
12月8日	水	青木	12:40-16:40
12月9日	木	金成	10:00-14:00
12月13日	月	青木	12:40-16:40
12月16日	木	金成	10:00-14:00
12月20日	月	青木	12:40-16:40
12月21日	火	金成	10:00-14:00

附属小学校勤務日:12/13 (月)

カウンセリングの申込み方法

- 1 担任・養護教諭を通して申し込む。
- 2 スマイル・ルーム直通電話で上記時間内に申し込む。☎024-634-6451 (直通)
※附属小学校勤務日は不在となります。
- 3 直接スマイル・ルームに来室する。(予約の方優先になります。)

図3 ある月の「スクールカウンセラーだより」

Ⅲ 教育相談推進委員会

1. 委員長より

1) 組織

全校の教育相談活動を包括的に推進する目的で平成17年度から発足した委員会である。22年度のメンバーは委員長（樋上）、各学年より1名ずつの教員、校長、副校長、主幹教諭、養護教諭、SCである。

2) 会合とその内容

会合は、原則として毎月1回、SCの出勤日にあわせて開催した。内容は、カウンセリングを行っている生徒・保護者への対応と相談の仕方についての協議や相談結果の報告等、また相談室を時折訪問しているもしくは以前に相談室を訪問していた生徒についての情報交換を中心としている。

会は概ね各学年からの報告、SCによる相談に関する報告と助言、SCとの協議の順で行われた。

会での話し合いの内容は、各学年教諭が各学年スタッフや各担任に伝え、共通理解を図った。

3) 成果と課題

本年度の成果は、カウンセリングを受けている生徒の担任や担当のSCから会合前に最近の様子を中心とした報告を資料にまとめ、その情報を蓄積したことで

該当生徒の変容を把握しやすくなったことである。さらに、会合の中で状況報告よりも該当生徒に対する助言や指導の協議に時間を費やすことができた。

課題としては、協議において該当生徒の情報をどこまで必要とするのかである。協議を進めるうえで、例えば生徒の学力や家族構成など必要な情報が多岐にわたる場合がある。来年度は、生徒に関する情報を精選して協議の資料として提示していく必要がある。

(この項 樋上 聖)

2. 主幹より

本校の場合、月1回のペースで教育相談推進委員会を開催することが容易でないこともあった。それでも、調整を図りながらなんとか毎月、教育相談推進委員会を開催することができた。定期的に委員会を開催したことで、カウンセリングを受けている生徒の変化やその生徒に対する指導、支援の流れを共有することができた。さらに、カウンセラーからのコンサルテーションをもとに、見通しを持ちながら学校としての方針を検討していくこともできた。ただし、会の進め方については、改善の余地がある。生徒の状況報告に時間をかけすぎてしまい推進委員会が長時間になることや明確な方策が見いだせないことなどがあった。

本校では、カウンセラーの勤務日誌を該当の担任教師と教育相談推進委員会のメンバーが回覧し情報の共有化を図っている。つまり、カウンセラーからのある程度の情報を随時、確認しているのである。そこで今後は、回覧で情報を共有していることを前提にして推進委員会を進め、会議の効率化と充実を図っていかねばならないと考えている。

また、本校では生徒指導委員会を各月に開催したり、職員会議の中で特に支援・指導が必要な生徒の状況を確認したりしている。こうした状況を踏まえて、主幹教諭として、それぞれの会議が実際の指導へとさらに機能するようコーディネートしていく必要があると感じている。

(この項 菅野 重徳)

3. 委員より

委員を担当して3年目になる。推進委員会が開かれる前に学年所属の教員から聞き取りをして、支援を必要とする生徒の状況と現在行っている支援、課題などをまとめ、推進委員会で報告する。委員会での討議は当該生徒への学年外教員、養護教諭、SCから情報と助言が得られ、学年だけでは見えないことが見えてくるときがある。

委員会での話し合いの結果を学年に持ち帰り、学級担任などに対応を依頼する。

月1回の委員会は時間的に都合するのが大変ではあるが、討議の内容は実際の支援に活用でき、また生徒

理解を深める貴重な場ともなっている。

(この項 根本 光二)

Ⅳ ピアサポートプログラム

ピアサポートプログラムは平成19年度までは生徒会保健委員会の活動の一環として実施していたが、平成20年度からSCだよりなどで実施を呼びかけ全生徒が参加対象者となった。平成20年度はインフルエンザの流行期や高校説明会の時期と重なり参加者が少なかったため、平成21年度は7月に3回構成で実施した。以前は3年生の参加が少なかったが、今年度は3年生が5名、1年生が1名と3年生の参加者が増えた。ファシリテータは金成が務めた。

参加者は「話すことが苦手」「自分の思いを上手に表現できない」などの動機から今回の募集に応じ、実施後は「自分自身を知るきっかけになった」「初対面の人と話すのは緊張するけど、知り合いになれると思った」など肯定的評価が寄せられた。

第1回の「聞く練習」では相手の言葉だけではなく、表情やしぐさ、声のトーンなどから相手の気持ちを推測する様子が見えたと感じた。

第2回の「考え方の癖を知ろう」では、自分の意見を上手に伝えられないこと背景には自分の対人関係に対する考え方の影響があるのではないかとという仮説を立て、参加者それぞれの傾向をチェックリストをもとに考えた。参加者からは「皆によく思われたい」「他者の目が気になる」や「人を傷つけない」など自分の考え方の癖が発表された。またその対処方法についてファシリテータから助言を行った。

第3回の「自分をサポート」では対人関係を作る際には自分への一定の肯定感が必要と考え、自分自身を認めたり励ましたりする視点を意識することを目的に「見守ってくれるもの」を実施した。参加者は「自分を見守ってくれるものが励ましてくれて嬉しかった」など感想を寄せた。

自発的参加者が多いことが影響してか平均参加率は72%と比較的高く、次年度以降も実施時期・回数については同様の条件で進めることを計画している。

表4 ピアサポートプログラムの開催日時と内容

回	月日	目標	内容
第1回	7/6	聴く練習	「スイッチ」 エゴグラム実施
第2回	7/8	考え方の癖を知ろう	「対人関係の癖をチェック」
第3回	7/13	自分をサポート	「見守ってくれるもの」 エゴグラム実施

(この項 金成 美恵)

V 附属四校園教育相談推進委員会

1. 目的

本委員会は、附属幼・小・中・特別支援学校が、教育相談機能の充実に向けて連携した実践を推進する中核的な任務を担う組織として平成16年度に発足した。子どもたちや保護者、教師のカウンセリングをコーディネートするとともに、各校園と家庭がより緊密な連携を図りながら、子どもたちを逞しく、健やかに育てるための教育相談を積極的に推進することを目的にしている。基幹校を附属中学校として、委員長（附属中学校長）、副委員長（附属中学校副校長）、庶務（附属中学校主幹教諭）、委員（各校担当教諭、各校養護教諭、SC）から構成されている。

2. 本委員会の活動

平成16年度以降、本委員会が中心となり各校園の教育相談推進体制や具体的な相談活動について協議を深めたり、SCを中心とする助言活動をおこなったりしてきているが、各校園における教育相談は年々充実してきている。特に、この数年は、附属特別支援学校における発達支援相談室「けやき」事業の推進、附属小学校における「ほっとルーム」の開設などにより、各校園における校内の教育相談は一層充実するとともに、広く他校や地域の教育相談へも尽力しているところである。本委員会の平成22年度の活動は、この発達支援室「けやき」や「ほっとルーム」担当者等との連携をさらに深め、附属間合同の各種会議・研修会など随時情報交換を図りながら各校の教育相談の推進に努めてきた。また、本年度の定例の委員会においては、「けやき」や「ほっとルーム」でも教育相談を受けてきた生徒を含め、3名の中学生の事例研究を中心に会合を持った。当該生徒の中学校における生活の様子や教育相談の現状について具体的に話し合い、今後の方向性を探るとともに各校園における教育相談のあり方等についても協議を深めた。今後も、各校園における教育相談にかかるそれぞれの取組・運営等との連携を一層密にしながら、実効ある教育相談を推進していきたい。（この項 小針 伸一）

VI 成果と今後の課題

1) 成果

平成17年度に発足した教育相談推進委員会は組織面の改善を重ねて、現段階では、多忙な学校活動の中で月1回の会議開催を確保し、必要な討議をなるべく効率的に行うことができている。この会議は、様々な生徒の問題を整理し、教員とSCが共に問題解決に向けて協議しうる点、SCの活動を教員に伝える点、2点において、教員とSCの連携の充実を生み出してお

り、SCを含む教育相談組織のありかたのモデルとしても意味ある成果をあげていると思われる。

また、本年度よりSCにより、中学校入学予定者の保護者面接が実現し、この活動は小学校から中学校へスムーズな移行に効果的であると思われる。

問題行動として顕在化していないが漠然とした不適応感をもっている生徒への予防的ケアのひとつとしてのSCの体験活動は、生徒がSCに対して感じる敷居の高さを減じる効果と、個別面接への移行をスムーズにする効果がある。また、SCの昼食も同様に敷居を低くする効果があり、またSCの観察から生徒の気になる面をチェックする機能をもつ。

2) 課題

附属4校園間の教育相談関連のさらなる充実が求められる。各学校園ではそれぞれ独自に取り組みされている教育相談事業があるので、それらの有機的結合をはかりつつ、要支援生徒に関する横断的、縦断的な連携がより一層はかられることが期待される。

加えて、平成23年3月11日の大震災により、通常とは異なるニーズが生じてくる可能性がある。被災状況での心のケアは、平成23年度の教育相談室活動の重要なテーマのひとつとなろう。

引用文献

- 1) 青木真理, 佐藤文子, 石井博行, 君島勇吉「平成14・15年度 附属中学校カウンセリング・ルーム活動報告」福島大学教育実践紀要第47号 pp63-66 2004
- 2) 青木真理, 渡部由美, 佐藤敏宏, 石井博行, 君島勇吉「平成16・17年度 附属中学校『教育相談室』活動報告 福島大学総合教育研究センター紀要 創刊号 pp115-118 2006
- 3) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 遠藤博晃, 天形健, 君島勇吉「平成18年度 附属中学校『教育相談室』活動報」福島大学総合教育研究センター紀要 第3号 pp109-112 2007
- 4) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 橋本浩幸, 天形健, 島 義一「平成19年度 附属中学校『教育相談室』活動報」福島大学総合教育研究センター紀要 第5号 pp97-100 2008
- 5) 青木真理, 金成美恵, 安藤久美子, 安田雄生, 天形健, 島 義一「平成20年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第5号 pp81-85 2010
- 6) 青木真理, 金成美恵, 樋上 聖, 二瓶久美子, 島 義一, 白石 豊「平成21年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第7号 pp49-53 2010